

台密教判の一問題

——特に大日經指帰に関連して——

大久保良峻

一

台密の教判は、円仁・円珍・安然の教説が規矩となつてゐる。殊に、円珍の大日經指帰と安然の教時間答では空海の十住心に対する批判がなされ、円密一致を基調とした教判が樹立された。

ところが、細部においては、円珍と安然の間には差異が見出されるばかりでなく、円珍のみに見てても大日經指帰を採り上げるだけではその教判論は語れないといった問題点が存するのである。これらのことや、台東両密の教判論評は古来の問題であり、最近においても研究成果が発表されてゐる。しかし、そこには再検討を要する事柄も含まれてゐるのであり、小稿では、大日經指帰を中心に台密教判の一斑を検討していくことにしたい。

二

先ず問題となるのは次に示す大日經指帰の文である。

第三總判釈者、先出誠文。次通會之。先出誠文者、釈云、又此經宗橫統一切仏教。如說唯蘊無我出世間心住於蘊中、即撰諸部中小乘三藏。如說觀蘊阿頼耶覺自心本不生、即撰諸經八識三無性義。如說極無自性心十緣生句、即撰華嚴・般若種種不思議境界、皆入其中。如說如實知自心名一切種智、則仏性・一乘・如來秘〔密〕藏、皆入其中。於種種聖言、無不統其精要。已上文上

次通會者、橫統之言義如大海。如來秘密藏何法不備。莫不常情妄生巨容。若嫌橫義之兼大小、未有一切純一之教。得此大綱、塵疑自解。……法華・涅槃及大日等撰如実句。或曰、仏性指大涅槃。一乘指法華經。如來秘密藏即持明藏・真言教者、此亦一見矣。今以為、仏性・一乘不可讀為兩句。說教次第有乱故也。法華与涅槃同明仏性・一乘旨故總含為一句。如來秘密藏

台密教判の問題（大久保）

為「真言」。或立十住心判二代教、未合此疏。不足為論耳。

秘密莊嚴法界樓閣即如実知自心之相。豈過此外更有法耶。

ここに「釈云」として引かれる文は、具縁品の義釈卷三・疏卷三に見出され、安然の教時問答卷二における十住心批判の一大典拠にもなっている。さて、ここでは義釈・疏の「此經宗橫統一切仏教。」という記を根拠に「如来秘密藏何法不備。」と言うのであり、如来秘密藏たる密教が一切法を備えたものであることを述べている。後でも言うように、実はこの如来秘「密」藏に対する解釈が問題となるのである。

そして、最も重要なのが義釈・疏の「如説如実知自心名一切種智、則仏性・一乗・如来秘藏、皆入其中。」という記述に対する理解である。すなわち、指帰では如実知自心の句に法華・涅槃・大日等の經が配されることを言うのであるが、義釈・疏の仏性・一乗・如来秘「密」藏に対し順に涅槃・法華・真言を該当せしめるのは一つの見識であるとしても、それでは説教の次第が乱れてしまうので、仏性と一乗を一句となし法華と涅槃を分かつべからざることを主張しているのである。更に、空海の十住心教判については、「未合此疏、不足為論耳。」とそれを斥けている。

ここで注意すべきは、一つには、如来秘密藏が仏教全般を統括すべきものであると同時に、余教との対比においては法華・涅槃と一緒に如実知自心に包摂されていることである。

次には、「一見」とした仏性・涅槃、一乗・法華、如来秘「密」藏・真言という説が教時問答の見解と一致していることである。すなわち、教時問答卷二には、「此中、仏性即涅槃經、一乗即法華經、秘藏即真言教。」と記されている。但し、大日經指帰と教時問答は共に撰述年代が必ずしも明瞭ではなく、その関係は明らかではない。

尚、大日經指帰では義釈ではなく、疏の諸文を「釈云」として引用しているのであり、義釈を第一とした義釈目録縁起・義釈目録が共に七十歳代の撰であることを考え併せるに、少なくともそれは円珍晩年の著作でないことは言えるであろう。そこで問題となるのが疑問や些疑文の記述である。そこには大日經指帰とは異なった説が主張されている。

疑問は上巻と下巻の一部については円珍の真筆が現存するようであるし、些疑文は壬寅の歳、すなわち元慶六年（八八二、円珍六九歳）のものである。このことをどのように考えるべきであろうか。場合によっては、大日經指帰の真偽をも考慮する必要が出て来るであろう。ともあれ、次には疑問及び些疑文を検討することにした。

疑問卷下

此土会云、仏性為大円寂經、一乗為法華經、如来秘藏大日經。又会云、仏性・一乗為一句、即指法華、如来秘藏大円寂經、如実知自心為大日經、此二是非如何。

後釈是少
即私解也。

些些疑文卷下

仏性・一乗已下、配対如何。此方或云、仏性指涅槃經、(一)乗是法華經、如来秘藏即大日經。或云、仏性・(一)乗合為一句。即法華經。以二乗即仏性故。如来秘藏非大日經、正指涅槃。以三點秘藏為仏性故。或人立十住心、以如実知自心為第八心、極無自性心為第九、秘密莊嚴心為第十一也。第八当天台、第九当華嚴、第十真言教也云。如此三説、阿誰得理。乞廻理決。

すなわち、義釈・疏の「仏性・一乗・如来秘藏」に対する配対として、疑問では二説を挙げ、後者が「小師私解」であると言う。些些疑文では十住心への言及もなされているが、義釈・疏の文についてはやはり二説を記している。尚、(一)の部分には仏全本には欠落しているので、日藏本で補ったが、これが無いと意味不通である。さてこれらを、前の大日經指帰の説と共に示せば次のようになる。

大日經指帰

① 仏性 涅槃經、一乗 法華經、如来秘藏〔密〕藏 真言教
「一見」説

② 仏性・一乗 法華・涅槃、如来秘藏〔密〕藏 真言教
「今以為……」説

疑問

① 仏性 大円寂經、一乗 法華經、如来秘藏 大日經
「此土会云」

台密教判の一問題 (大久保)

② 仏性・一乗 法華經、如来秘藏 大円寂經、如実知自心
大日經
「小師私解」

些些疑文

① 仏性 涅槃經、一乗 法華經、如来秘藏 大日經

② 仏性・一乗 法華經、如来秘藏 涅槃經

この中で、疑問にある大円寂經とは涅槃經のことと考えられる、①は三書共、教時間答の説と一致する。しかし、三書における円珍説と理解される②は、疑問と些些疑文とは一致するが、それらと指帰とは異なるのである。共通することは仏性と一乗を一句となすことであるが、そこに配されるのも指帰では法華・涅槃の二經であるのに対し、疑問と些些疑文では法華經のみである。そして、指帰では如来秘藏が真言であるのに、疑問と些些疑文ではそれは涅槃經となっているのであり、特に疑問では、大日經はそれらを統括する如実知自心に配されているのである。

この差異を如何に理解すべきであろうか。また、教時間答との関わりも問題である。些些疑文が書かれた元慶年間には安然の述作活動が最も盛んだった頃であり、菩提心義抄もその後の仁和元年(八八五)の著作である。従って、教時間答が菩提心義抄以前のものであれば、元慶年間に円珍の目に触れた可能性はある。しかし、いまは問題提起に止めておきたい。ともあれ、大日經指帰の扱いには注意が必要であることは、

上述のことから言えるであらう。

三

次には、教判論評の観点から大日経指帰を眺めることにしたい。古来の論評において、大日経指帰が円珍の真撰として扱われていることは言うまでもない。尚、台東両密の教判論評については、既に獅子王円信氏の研究があるが、問題を大日経指帰に絞って再検討することにする。

先ずは、台密の秀暲破するところの、実範における大日経指帰の引用を見ることがしたい。実範の大經要義鈔卷三には問題となるところが二箇所ある。

①又彼仏性為涅槃、如来秘藏為真言。此義不然。仏性・一乘是法華故。如来秘藏非真言。故。故智証云、法華・涅槃同明仏性・一乘旨故總為一句、如来秘藏為涅槃教云云。此經橫統諸仏教二者、是明此經撰余顯教。非此密教撰真言故。

②大日経指帰云、法華・涅槃同明仏性・一乘旨故合為一句。如来秘藏為涅槃教。或立十住心判一代教、未合此釈。不足為論耳。秘密莊嚴法界樓觀即如実知自心之相。豈過此外更有法耶云云。

前者は、安然の「此中、仏性即涅槃經、一乘即法華經、秘藏即真言教。」という教説を批判するために円珍の説を利用して文脈での引用であり、後者は円珍の説そのものを批

判するための文脈での引用である。ここで気づくことは、特に②では明瞭に大日経指帰の名を挙げ文面もそれに準じたものであるにも拘らず、如来秘藏が涅槃教となっていることである。そこで、日藏本や仏全本では、それぞれに小字で、「智証釈出大日経指帰。而正文、如来秘藏為真言。故不可証矣。引之于茲蓋語記之失耳。」「涅槃教、正文作真言二字。」と註が施されている。そのためか、獅子王氏や那須政隆氏は②の文を指帰の原文に合うように直して引用されているが、それは誤りである。実範が上記の如く指帰の文を引用したことは、後述する大日経疏指心鈔によっても分かる。

さて、このことに関連して注目されるのは、重誉の十住心論鈔卷中の記述である。何となれば、そこに引かれる指帰の文の「今以為」以下、すなわち円珍自説の内容が疑問や些些疑文の説と一致し、仏性・一乗が法華を示す一句とされ、如来秘藏が涅槃經とされているからである。そして、それにより安然を批判していることは、前記した実範の大經要義鈔の文の①と同趣意である。しかし、なぜ実範や重誉は、指帰の文をそのように引用したのであるうか。今、その理由は分からない。ただ、重誉の十住心論鈔は保延五年（一一三九）に光明山で著されたものであり、天養元年（一一四四）に没した実範が晩年中ノ川から移った所が光明山であったことを考え併せるに、両者が緊密な関係にあったことは肯ぜられよう。

尚、指帰の原文が実範や重誉の引用の如くであったとは、他師の引用からも考えられない。

さて、次に取り上げたいのが信証である。信証は実範と同時代の人であり、その著、大日経干栗多鈔（大日経住心鈔）巻六で大日経指帰や教時間答の教判を批判した。因みに、そこに引かれる指帰の文は現行のものと一致するが、仏性・一乗・如來秘藏の配対について直ちに批判しているというわけではない。そこで問題としたいのは、果たして獅子王氏の言われるように、台密の隆禪が批判したのが信証であったのかということである。結論を先に言えば、そうではなかったということである。隆禪の著作は現在伝わらないようであり、そこで、義釈搜決抄（卷二之四、卷二之五）所引の文に基づいて隆禪の東密批判を見ることになるが、搜決抄の引用に依るに、隆禪が論破したのは「証信」である。獅子王氏がこれを「信証」とされたのは、搜決抄卷二之四の、「又証信僧正云者、五大院破旨祖師（隆禪のこと）モ被レ載之。此、誰人耶。信証僧正云人コソアレ、ソレハ輔仁親王御子ニテ宮僧正云ヒケル人也。若其事歟。文字上下シタル歟。若又別証信云者有之歟。可レ問之。」という記述に基づかれたのであるが、仁空もよく分らなかったらしい。しかし、搜決抄における隆禪の破文を検討してみると、それは作者不詳とされている十住遮難抄（大正藏卷七七所収）に對したものであることが分か

ったのである。

十住遮難抄は主として教時間答を批判したものであり、教時間答が仏性・一乗・如來秘藏を涅槃・法華・真言に配していることについて、「而仏性・一乗・如來秘藏、皆法花・涅槃所說法門。涅槃說秘密之藏、所謂方等經典。法花說一切如來秘要之藏等也。……」と私見を挙げている。そして、その後に「智証大師云」として大日経指帰の文を引用しているが、それは現行のものに一致している。従って、如來秘藏を真言とするその説は、安然說同様否定される。

さて、それでは隆禪の難じたこの十住遮難抄の撰者である証信とは如何なる人物であったのであろうか。このことについても、今は不明である。しかし、信証でないことは確実である。それは、次に言及する頼瑜の大日経疏指心鈔の記に依っても知ることができる。

指心鈔卷一四には、上に検討したことについて、大變興味深い記述が見出される。というのは、そこには大日経指帰に對する見解について、実範の大經要義鈔や重誉（朝誉）の十住心論鈔のみならず、十住遮難抄も引かれているからである。それらは、「朝誉云」、「実範云」、「進上人云」等と引用されている。この「進上人」が十住遮難抄の著者であり、「進聖人」或は単に「進」とも書かれている。そこには実範を「範」、朝誉を「誉」と略記し、更には、信証の大日経干

栗多鈔（大日經住心鈔）卷六の文を「証僧正云」として引用している箇所が見出されるのであるから、「進」は名の下一字を取ったことは明らかである。となると、搜決抄に言う「証信」の「信」と音は通じることになるが、それ以上のことについては不明である。後考を待つことにしたい。尚、頼瑜は円珍説に対する実範・重誉（朝誉）・進の三義を掲げた上で、仏性・一乗が涅槃經、如来秘藏が法華經であるという自説を打ち出している。

以上、教判論評における大日經指帰の扱いを見て来た。その中には、実範や重誉の撰著の如く原文通り引用しないものがあり、また、義釈・疏の仏性・一乗・如来秘藏に対する理解も様々であるとしても、如来秘藏を真言とする指帰の説を東密では概ね採らないことは言えよう。そしてそれは、安然への批判ともなっている。勿論、東密では十住心の綱格を崩すことはない。それに対して、台密では、円密一致の観点から、帰趨すべき典拠を直ちに義釈・疏に求めた円珍・安然の教説が根幹となっているのである。従って、疑問や些些疑文に如来秘藏を涅槃經に配する説が見出されるとしても、常に円密一致が基盤となまっていることに留意しなければならないであらう。

1 獅子王円信「台東両密の教判史上に於ける論評」（『叡山仏教研究』所収。この論文は密教研究三九号所載の同名論文の改訂

版である）、那須政隆「十住心の構成について」（智山学報四輯）等参照。

2 敬光の大日經指帰講翼（天王寺福田蔵）では泉宝の大日經疏演奥鈔卷二の記を引き、そこに引用される些些疑文の前説を五大院安然、後説を「未知説者」とするが、疑問の記を考え併せるに、後説を円珍説として差し支えなからう。因みに、演奥鈔では、「……仏性・一乗は如来秘藏故、指法華・涅槃兩經云如来秘藏也。」と述べている。

3 註1参照。『天台学概論』（四一〇頁～四一三頁）も獅子王氏の説に基づいている。

4 秀蓮なのか秀蓮なのか必ずしも明確でなく、獅子王氏の論文でも両方が混在している。『天台学綱要』所収の『台密綱要』

（二三頁）では「秀蓮」とする。尚、秀蓮が実範を破したのは教時義鈔（天王寺福田蔵には教時義談義として所蔵）であるが、義釈搜決抄（卷二之四・卷二之五）では特に書名を挙げず「菩提院僧都秀蓮」「菩提院」等と引用している。血脈については、『天台学概論』（四七九頁）参照。

5 註1参照。

6 大正七七・六五九頁中下

7 実範については、佐藤哲英『念仏式の研究』中ノ川実範の生涯とその浄土教』参照。尚、義釈搜決抄卷三之四（天全一三・六一一頁下）では、実範が承安三年（一一七三）に、安然に対する破文を造ったとするが、それも考察すべき一問題である。

8 仏全四二・三一九頁上以下

9 大正五九・七七三頁中以下

10 信証の住心決疑抄では、覚苑や自宗の古徳の説、指帰の説を挙げ、「如是定判不可一途」と言う。

△キーワード△ 台密教判、大日經指帰、十住遮難抄、実範（早稲田大学大学院）